

絵巻物に描かれた橋に関する考察

松村 博¹

¹正会員

E-mail: hmatsumura@leto.eonet.ne.jp

平安時代後期から中世に製作された絵巻物は当時の生活実態や建物、インフラの状況をリアルに描写されていると考えられ、貴重な史料となっている。本稿では絵巻物に描かれた橋を抽出して、構造的、形態的分類を行い、当時の橋の実態を探ることを目的とした。中でも最も信頼性が高いとされる『一遍聖絵』を基準として他の絵巻物にも拡張して分析を試みた。結果として絵巻物が、橋の歴史を記述する上で貴重な参考資料となることが証明できたと考える。

Key Words : Structure&Form of Bridges, Picture scroll, Medieval era

1. 絵巻物に描かれた橋

江戸時代以前の橋の構造やデザインを知る史料は多くはない。発掘調査によって橋の遺構が確認された例はかなりあるが、上部工まで復元できるような成果はまれにしかない。古代の絵画資料もほとんど残されていない。その中で時代をさかのぼることができる史料としては、主として中世に作られた絵巻物が最も有力なものと言える。

絵巻物に描かれた事物を詳細に分析することによって、当時の建物や道などのインフラ、さらに庶民生活の実態に迫ろうとする試みもなされている（文献1）。この文献から多くのヒントを得ることができるが、橋や道の解釈にはやや疑問とする点も見受けられる。

絵巻物はその表現においてデフォルメされた面も多いが、当時の民衆の生活や身近な建造物が比較的リアルに描かれていると考えられる。そこに描かれた橋を抽出し、比較分類することによって、当時の橋の実態を探って

みることにした。筆者は過去にこのテーマを扱ったことがある²⁾が、今回は調査対象を増やし、テーマを絞って検討し直すことにした。

表-1は12世紀後期から15世紀に作られた絵巻物に描かれた橋を抽出したものである。多くの絵巻物の中でも『一遍聖絵』はその描写において最も信頼性の高い資料であるとされている。人物は勿論、風景、建築物、道や橋などの描写はその量においても精密さにおいても圧倒的である。橋に関しても規模の大きな橋から家の前の溝に渡された一枚の板に至るまで様々な形式、形態の橋が描かれている。以下では『一遍聖絵』を中心に他の絵巻物も参考にして、同時代の橋の構造や形態について考察する。

本稿では小さな溝に渡された一枚の板橋は対象とはしない。小規模であっても杭で支えられているなど、何らかの構造的な工作がなされているものを対象とした。また、中国などの国外の情景を想像によって描いたとされるものを除外し、我が国のものに限定した。

表-1 絵巻物に描かれた橋

	題名	製作時期	模本時期	橋
1	年中行事絵巻 一住吉家本	1165年頃	江戸初期	(巻1)待賢門前の板橋2, 院御所寝殿中庭の反橋2, 賀茂の河原の小板橋と桁橋, 院御所寝殿前庭の反橋2, (巻3) 貴族邸東中門内の庭の橋, 貴族邸西中門外の庭の板橋, (巻4) 待賢門前の橋, 清涼殿南庭の板橋2, (巻6) 東三条殿中庭の反橋と石橋, 清涼殿前の石橋, (巻8) 左近衛の馬場末の小川の橋, 馬場末の町中の桁橋, (巻9) 祇園社通の桁橋, (巻10) 貴族邸庭園の橋, (巻12) 梅宮社馬場前の橋, 梅宮社中門前の反橋, 今宮鳥居前の板橋, (巻14) 東市堀川の橋, (巻16) 京郊外の板橋, 京郊外の桁橋
	同 一別本第1		不明	(巻1) 賀茂社楼門前の反橋, 橋殿

2	信貴山縁起	12世紀前～中期		(延喜加持巻)内裏門前の高欄付桁橋
3	粉河寺縁起	12世紀後半		(第3段)長者邸門前の桁橋, (第5段)粉河の土橋
4	北野天満縁起 —承久本	13世紀初		(巻1)菅原是善邸門前の桁橋
5	駒競行幸絵巻	13世紀半ば		(静嘉堂本)高陽院中門内庭園板橋, (久保本)高陽院寢殿南庭の反橋
6	当麻曼荼羅縁起	13世紀半ば		(下巻第3段)棧道
7	地藏菩薩靈驗記	13世紀半ば		邸内前栽の反橋, 狛行高邸内の桁橋, 佐保川の桁橋
8	住吉物語絵巻 —静嘉堂本	13世紀後半		剝り木の土橋
9	小野雪見御幸絵巻	13世紀後半		(第1段)小野郷長代川の板橋, 皇太后宮仮御所前栽の反橋
10	平治物語絵巻	13世紀後半頃		八条堀川辺りの板橋
11	蒙古襲来絵詞	永仁元年(1293)		(上巻)秋田泰盛邸門前の桁橋
12	伊勢新名所絵歌合	永仁2～3年(1294～5)		岡本里の板橋, 大沼橋(板橋)
13	天狗草紙	永仁4年(1296)		(延暦寺巻)日吉社西本宮前の桁橋, 西本宮横の屋形橋, 根本観音堂横の桁橋, (東寺巻)奥院参道の桁橋
14	一遍聖絵	正安元年(1299)		(第1)信州犀川堤防の板橋, (第2)高野山奥の院参道の反橋, (第3)熊野山中の棧道, 熊野新宮横の板橋, 三華九品道場庭の反橋, (第4)備前国の板橋, 筑前国の館門前の桁橋, (第5)信州大井邸横 の板橋, 常陸国の板橋, 常陸国の高欄付桁橋, 下野国内の板橋, 陸奥 国の板橋, 鎌倉市中の土橋, (第6)三島社参道の反橋と平橋, 富士川 の船橋, 尾張甚目寺付近の桁橋, (第7)関寺門前の板橋, 関寺中島の 板橋, 京都桂川の板橋, 四条大橋, 四条東京極付近の桁橋, 市屋の道 場横の板橋, 堀川の板橋, (第8)当麻寺付近民家木戸前の土橋, (第9)円教寺付近の板橋, 淀の上野の板橋2, (第10)軽部の里の板 橋, 大山祇社馬場横の板橋, (第11)明石の水路橋2
15	春日権現験記絵	延慶2年(1309)	昭和11年 (1936)	(巻16)笠置山参道の桁橋, (巻19)高尾山の板橋, (巻20)春日山参 道の桁橋
16	松崎天神縁起	応長元年(1311)		(巻1)菅原是善邸内の反橋, (巻5)東山麓の邸内前栽の板橋
17	石山寺縁起	正中年間(1324～6)		(巻5)勢多橋, 宇治橋(高欄付桁橋)
18	稚児観音縁起	14世紀初		長谷寺参道脇の土橋
19	法然上人絵伝	14世紀前半		(巻2)京の小川の桁橋, (巻8)月輪邸(九条兼実邸)庭園の反橋と平 橋, (巻10)法住寺御所の反橋, 泉殿, (巻11)九条兼実邸庭園の反橋 と平橋, (巻14)大原勝林院参道の桁橋, (巻16)四天王寺西門内の 桁橋
20	慕帰絵詞	観応2年(1351)		(巻6)松島の板橋、反橋
21	弘法大師行状絵詞	14世紀末		(巻2)久米寺境内庭園の反橋, (巻4)唐宮廷庭園の橋, (巻6)清滝川 の反橋, (巻12)紀ノ川の土橋、高野山玉川などの桁橋
22	芦引絵	15世紀半ばすぎ		(巻2)宇治橋
23	道成寺縁起	15世紀後半		(下巻)日高川擬宝珠付桁橋
24	西行物語絵巻 —渡辺家本	明応9年(1500)	江戸初期	(1巻)鳥羽院庭園の反橋, 賀茂社門前の桁橋, (2巻)法金剛院御所 庭園の反橋, 江口の里の板橋, (3巻)仁和寺北院の橋殿

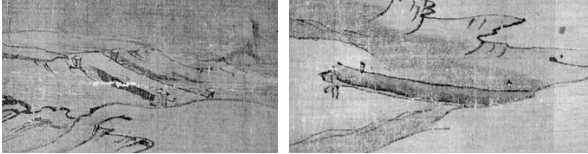
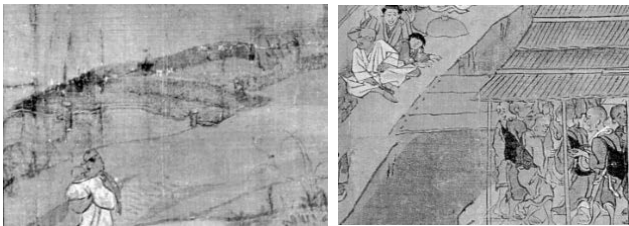
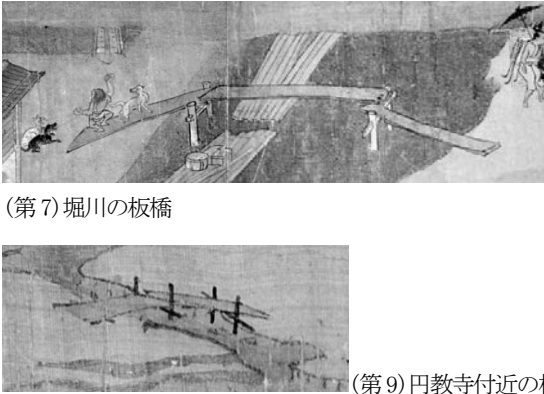
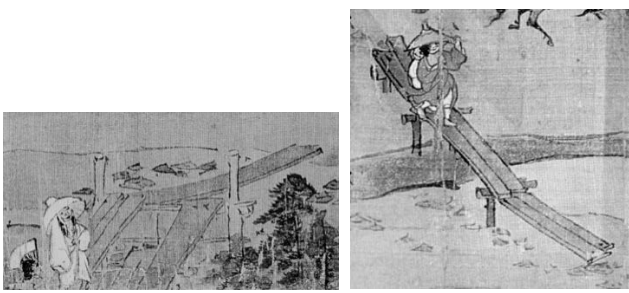
〈参考にした文献は以下のとおりである〉

- 1: 日本絵巻大成 8 1977. 12、2: 日本絵巻大成 4 1977. 4、3: 日本絵巻大成 5 1977. 6、4: 日本絵巻大成 21 1978. 10、
5: 日本絵巻大成 23 1979. 1、6: 日本絵巻大成 24 1979. 2、7: 続日本の絵巻 23 1992. 11、8: 日本絵巻大成 19 1978. 2、
9: 日本絵巻大成 19 1978. 2、10: 続日本の絵巻 17 1992. 2、11: 日本絵巻大成 14 1978. 10、12: 日本絵巻大成 12 1978. 5、
13: 続日本の絵巻 26 1993. 3、14: 日本絵巻大成別巻 1978. 11、15: 続日本の絵巻 13, 14 1991. 4, 6、16: 続日本の絵巻 22 1992. 10、

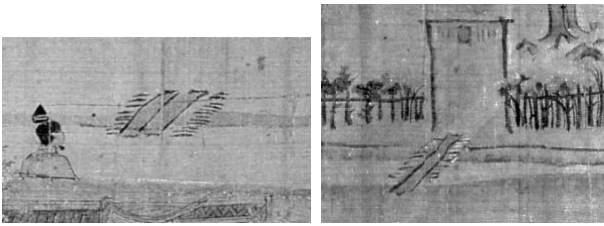


17：日本絵巻大成 18 1978. 7、18：日本絵巻大成 24 1979. 2、19：続日本の絵巻 1～3 1990. 2～3、20：続日本の絵巻 9 1990. 9、
21：続日本の絵巻 10, 11 1990. 10, 12、22：続日本の絵巻 25 1993. 1、23：続日本の絵巻 24 1992. 12、24：日本絵巻大成 26 1979. 5

表-2 『一遍聖絵』に描かれた橋の分類

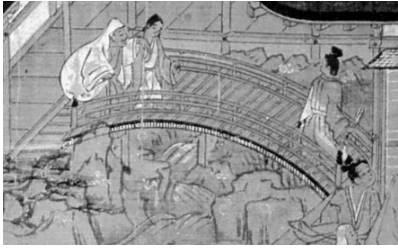
(1) 板橋

1 径間	
<p>① 1 枚板</p>  <p>(第5) 下野国内の板橋 (第10) 軽部の里の板橋</p>	<p>② 並列複数板</p>  <p>(第4) 備前国の板橋 (第7) 関寺中島の板橋</p>
複数径間	
<p>③ 1 枚板縦列</p>  <p>(第7) 堀川の板橋 (第9) 円教寺付近の板橋</p>	<p>④ 複数板縦列</p>  <p>(第7) 桂川の板橋 (第9) 淀の上野の板橋</p>

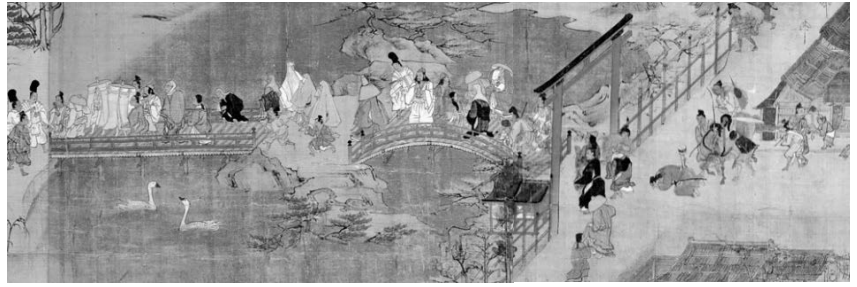
(2) 桁橋

1 径間	
<p>⑤ 簡易構造 (土橋含む)</p>  <p>(第5) 鎌倉市中の土橋 (第8) 当麻寺付近民家木戸前の土橋</p>	<p>⑥ 1 径間の桁橋</p>  <p>(第4) 筑前国の館門前の桁橋 (第7) 四条東京極付近の桁橋</p>
複数径間	
<p>⑦ 多径間の平橋</p>  <p>(第5) 常陸国内の高欄付桁橋 (第7) 四条大橋</p>	

⑧反橋



(第3) 三輩九品道場庭園の反橋



(第6) 三島社参道の平橋と反橋

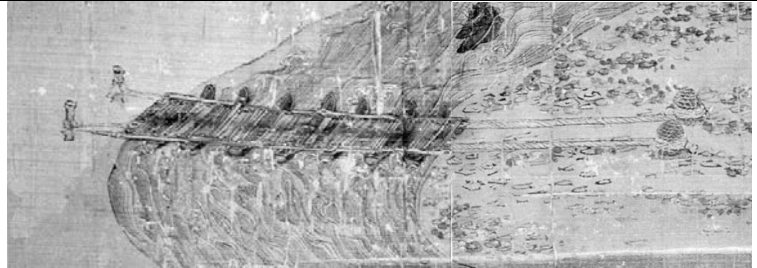
(3) 特殊構造の橋

⑨栈道



(第3) 熊野山中の栈道

⑩船橋



(第6) 富士川の船橋

2. 『一遍聖絵』に描かれた橋の分類

『一遍聖絵』に描かれた橋を表-2のように分類した。分類は構造による分類を基本にしているが、形態的要素も加味している。文献3)では『一遍聖絵』の中の橋を丁寧に抽出して、48の橋を挙げている。これらの橋の材料は大半が木材で、板石を橋軸方向に架け渡した石橋と見えるものもあるが、数は少ない。本稿では何らかの構造的な細工が施されているものを対象にした。

①は、一枚の板が渡されただけの最も簡易な橋であるが、両端の杭よって梁が固定されて、その上に橋板が載せられている。②は一径間であるが、橋板が2,3枚並列に並べられ、少し幅の広い橋になっている。③は、途中にいくつかの橋脚が建てられ、複数径間になったもので、少し幅の広い川を渡るものである。「(第7)堀川の板橋」は京の七条通と堀川との交差点付近にあたると思われるが、人ひとりが渡れる程度の簡易な板橋が架けられていたことになる。川に沿って筏を引っ張り上げる様子が描かれており、筏や小舟が橋の下をくぐる様に橋面を高くしてあった。④の「(第7)桂川の板橋」では桂川の渡河点が描かれていると考えられる。一部分しか描かれていないので全体像は不明であるが、板も整然とは並べられておらず、随分不安定な構造であったと想像される。

⑤以下は、桁を渡した上に橋板を並べた桁橋の例である。⑤は、橋軸方向に板が敷かれているが、下に細い木材

らしいものが見えており、桁を渡した上に簀子状に細い枝などが並べられていると考えられる。その上に直接板を載せるとがたつくので、土を載せて土橋にした上に歩きやすくするために板を敷いたものと推測される。

⑥は、屋敷の周りの堀や細い川に架けられた一径間の桁橋の例である。橋板が橋軸直角方向に並べられているので、下には当然2本以上の橋桁が設置されているはずである。高欄はなく、端部に地覆が置かれ、その両端には低い親柱が立てられている。

⑦は、一般的な道路が比較的幅の広い川を渡るために架けられた多径間の桁橋である。『一遍聖絵』でもその例は少ない。「(第5)常陸国内の高欄付桁橋」は幹線道にあたると思われるが、位置の特定は難しい。高欄は付けられてはいるが、低く、弱々しい。「(第7)四条大橋」は京の鴨川に架けられた橋で、『一遍聖絵』の中では最も立派な構造の橋である。橋上の八葉車の大きさからすると、幅員は4mほどであろう。人の腰の高さ程度の高欄が建てられ、端部に擬宝珠付の親橋が設けられている。⑧は、寺社の境内に架けられた反橋の例である。反橋は大きな勾配を持つ橋のことであるが、構造的には桁橋である。当時の日本ではアーチ構造は見えない。

⑨の「(第3)熊野山中の栈道」は山間部に作られた栈道である。構造はよくわからないが、外側に並んで見えている棒の崖側の一端が崖に掘り込まれた穴に固定されるとすれば、後の木曾の栈道のような刳木構造に分類で

きるかも知れないが、想像の域を出ない。

⑩の「(第6)富士川の船橋」は、当時、実際に船橋が設置されていたとすれば、もっと長く、船の数も多かったと考えられる。船をつないだ綱が一端は杭に固定され、他端は蛇籠のような物に巻き付けられているが、増水時には蛇籠側の綱がほどけて、杭側の岸へ引き寄せられ、流失の危険性を少なくする工夫であったと推測される。下流に渡船の様子が描かれていることから、舟運に支障が生じる船橋は臨時の橋であった可能性が高い。

3. 橋の構造的分類

上記のように『一遍聖絵』に描かれた橋の構造は、板橋、桁橋、栈道、船橋の4種類に分類される。材料も船橋の綱以外は木材で、石材は一枚板の板橋以外には見当たらない。それらを他の絵巻物に描かれた橋でも確かめることにする。

(1) 板橋

橋脚によって支持された一枚板の橋、数枚の並列板の橋、縦列の板橋があり、継橋、棚橋などと呼ばれることもあるが、構造的には変わるところはない。

典型的な板橋は『年中行事絵巻』にも見られる。図-1、2の橋とも板は两岸の橋脚で支えられている。いずれも比較的人通りの多い道に設置されたものと考えられるが、構造的には簡易的なものである。図-3は典型的な板橋の例で、歌の名所となった橋である。そこそこの規模を持つが、高欄もない、不安定な構造である。



左：図-1『年中行事絵巻』(巻14)「東市堀川の橋」

右：図-2『年中行事絵巻』(巻16)「京郊外の板橋」

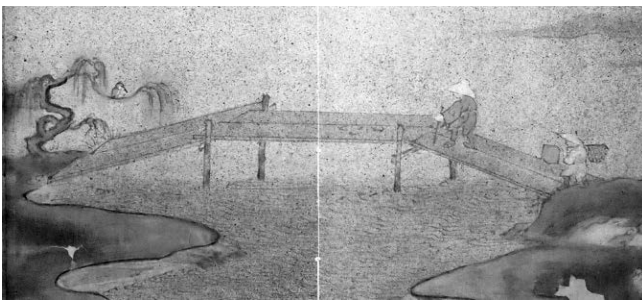


図-3『伊勢新名所絵歌合』「大沼橋」



図-4『住吉物語絵巻—静嘉本』(上巻)「割り木の土橋」



図-5『平治物語絵巻』「八条堀川辺りの板橋」

図-4は板の代わりに割り抜き材を用いた板橋の一例とも言えるが、橋面に土が敷かれ、土橋でもある。

図-5は奇妙な板橋の例である。複数の板が橋軸方向に並べられ、四隅に設置された杭に支えられた上下の梁に挟み込まれるように固定されているように見える。通行者にとっては上の梁が邪魔になると思われる、このような構造の橋が実際にあったかどうか疑問が残る。

板橋や簡易な桁橋の上部工を支える杭と梁の結合方法にはいくつかの種類が見られる。図-6の①、②は梁を杭に縄などで結わえたもので、②のように枝分かれ箇所を利用することもあった。③と④は2本の杭で梁を挟むように固定したもの、⑤と⑥は杭の側面に切欠きを作り、梁材を食い合わせて結合したもの、⑦は杭に貫を入れて梁としたもので、楔で固定された。⑧は柱の頂部に梁を載せたもので、ホゾ加工が施されていたと考えられる。

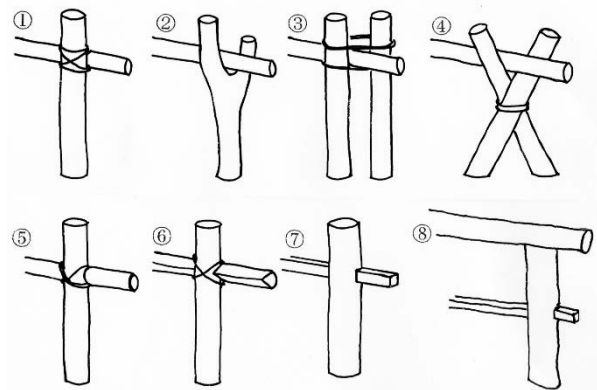


図-6 橋杭と梁の結合方法

(2) 桁橋

橋台、橋脚に支えられた桁の上に橋板が並べられたもので、土橋、平橋、反橋などの形態がある。

1) 1 径間の桁橋

絵巻物には社寺や貴族、武家の屋敷を描いた場面が多く、その門前の堀などに一径間の短い橋が多く見られる。

図-7 の橋は堀に架けられた一径間の橋であるが、橋板の代わりに細い丸太が並べられた素朴な橋である。部分的に土が置かれていたかも知れない。

図-8、9 の橋は平滑な橋板が並べられた桁橋で、四隅に短い親柱が建てられ、橋板は地覆で押さえられている。

図-9 の橋は非常に整った桁橋で、庭園の一部を思わせるような堀に架けられている。図-8 とともに堀の護岸が横板で整えられており、屋敷の造りの丁寧さがわかる。

短径間の板橋は、図-10、11 のように、比較的人通りの多い町中の通りが小さな川や堀を越える所にも見ることができる。図-11 では中央に間伏板が描かれており、橋板を中央で継ぐ技術もあったことが推測される。

簡易な桁橋では主桁に丸太を用い、その上にほとんど加工をしない丸太などを並べて、橋面の凹凸を無くすために土を載せた土橋が採用された。

図-12 は橋面が丸太、板、削り抜き材で構成された土橋で、有り合わせの材料を工夫して使った例である。

このような簡易な橋ばかりでなく、図-14 の『弘法大師行状絵詞』(巻 12)の紀ノ川の橋に見られるような長い橋も土橋形式になっていたことは、当時は本格的な桁橋の建設と維持が難しかったことを示していると言えよう。

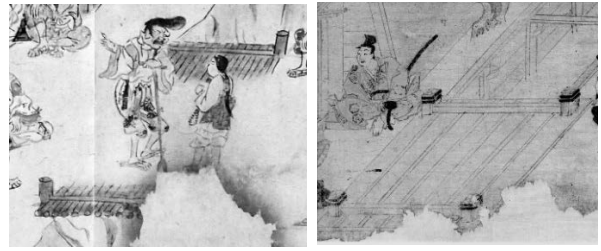
2) 多径間桁橋

図-13 は、『一遍聖絵』(第 7) に描かれた四条大橋の構造を推定した断面図である。橋杭には 2 段の水貫が入れられ、筋違は見えない。このような広い幅員を持ち、高欄付の多径間の橋は多くは見られない。『石山寺縁起』(巻 5)の勢多橋と宇治橋は朱塗の高欄と擬宝珠を持つ本格的な橋として描かれている(図-15、16)。勢多橋は東海道、宇治橋は京大和街道の要の橋としてほぼ途切れることなく存続していたと考えられるが、絵図のような姿であったかは定かではない。

この宇治橋と『芦引絵』(巻 2)の宇治橋(図-17)を比較してみると、表現は大きく異なるが、橋脚柱際に石積のようなものが見られ、橋脚杭を補強する工夫がなされていたと推測され、注目される。

3) 特殊構造の橋

- ・ 棧道：切り立った崖に道を造った棧道が、『一遍聖絵』(第 3)と『当麻曼茶羅絵巻』(下巻第 3 段)に描かれている。構造の詳細は不明であるが、一方が崖に穿かれた穴に入られていれば、刎木構造に分類できる。
- ・ 船橋：船橋は『一遍聖絵』以外には見当たらない。



左：図-7『粉河寺縁起』(第 3 段)「河内国長者屋敷門前の桁橋」
右：図-8『蒙古来襲絵詞』(上巻)「秋田泰盛邸前の桁橋」

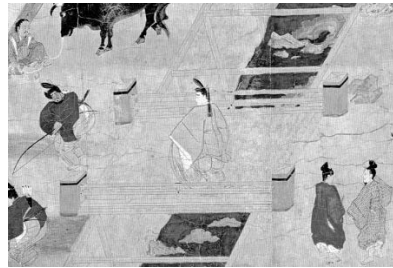


図-9『北野天神縁起一承久本』(巻 1)「菅原是善邸門前の桁橋」



左：図-10『年中行事絵巻』(巻 9)「祇園社通の桁橋」
右：図-11『年中行事絵巻』(巻 16)「京郊外の桁橋」

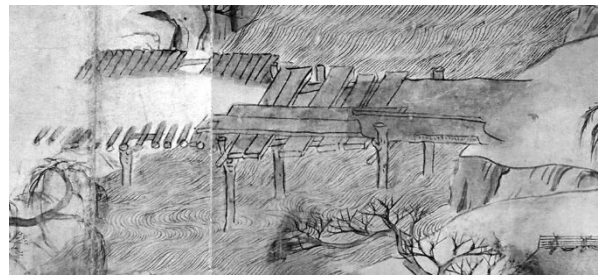


図-12『粉河寺縁起』(第 5 段)粉河の土橋

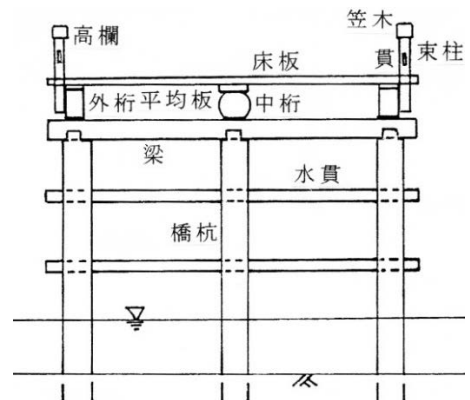


図-13『一遍聖絵』(第 7)四条大橋の推定断面図

4. その他の考察

(1) 反橋

絵巻物には、社寺や貴族の館を描いた場面が多く、その参道や庭園に趣向を凝らした橋が架けられている。

庭のせせらぎに野趣を表した木板や石板が渡された。また、寝殿造の前庭には反橋が配され、平橋と反橋を連続して架けるなどの演出があった。図-18では、きらびやかな反橋とともに自然石に近い石橋が配置された庭園が描かれている。

寝殿造系の庭園には朱塗の反橋が効果的に配置される。平安時代後期に編纂されたと推定される『作庭記』には「そり橋の下が御殿の上座から見えるのは良くないから橋の下に大きな石を立てるべきである。また島から橋を渡す場合は正面を御殿の中心に向けてはならない。筋を変えて、橋の東の柱を階段の西の柱に向けるべきである。」とあり、当時の最もすぐれた庭は高陽院であるとされている⁴⁾。その庭の一部が『駒競行幸絵巻』に描かれている(図-19)。同様の庭園橋は、『年中行事絵巻』(巻1)「院御所寝殿前庭」にも見られる。

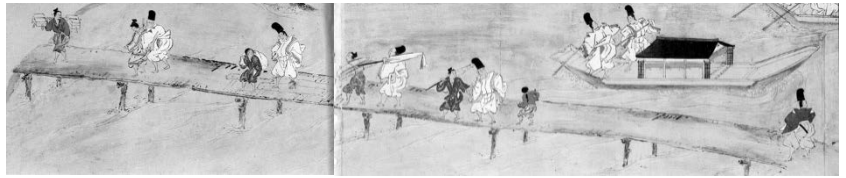


図-14 『弘法大師行状絵詞』(巻12)紀ノ川の土橋

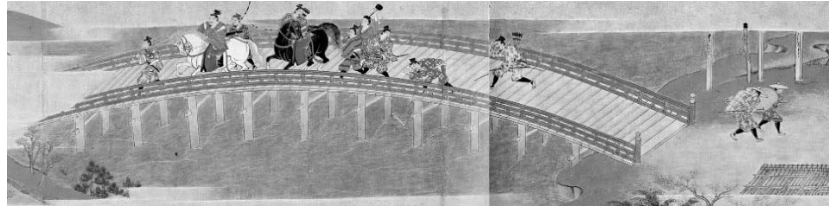


図-15 『石山寺縁起』(巻5)勢多橋

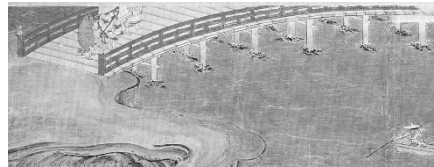


図-16 『石山寺縁起』(巻5)宇治橋



図-17 『芦引絵』(巻2)宇治橋



図-20 『法然上人絵伝』(巻11)九条兼実邸庭園の反橋と平橋

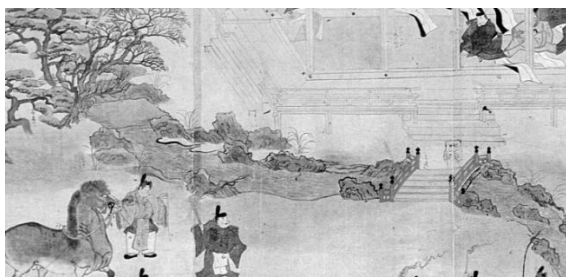


図-18 『年中行事絵巻』(巻6)東三条殿庭の橋

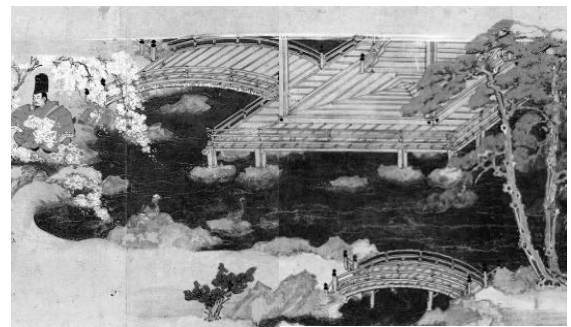


図-21 『法然上人絵伝』(巻10)法住寺御所の橋殿

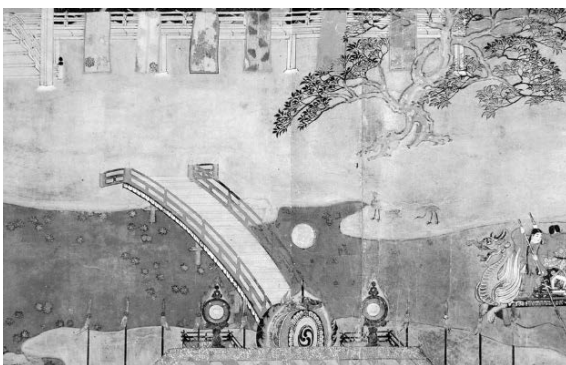


図-19 『駒競行幸絵巻』「高陽院南庭園の反橋」



図-22 『天狗草紙』(延暦寺巻)日吉社西本宮横亭橋

反橋と平橋を直列的に並べる手法は『一遍聖絵』(第6)三島社の参道にも見られたが、『法然上人絵伝』(巻8)月輪邸庭園や(巻11)九条兼実邸庭園(図-20)でも描かれており、これらは平橋—反橋—平橋と3連になっている。

これらの橋は朱塗、擬宝珠付の高欄を持ち、黒塗の桁の側面には剣巴文が白く描かれるというパターン化された様式を持っている。このようなデザインパターンは平安時代には確立されていたと考えられる。

(2) 屋形橋

寝殿造の邸宅では遣り水を配して、その上に橋殿を建て、主建物と橋で結ぶ形態が採用されていた(図-21)。

建物とは独立した形態で、屋根を持つ橋も見られる(図-22)。屋形橋とか廊橋と呼ばれるが、庭園の景観に一味を加えるものとして発展していく。

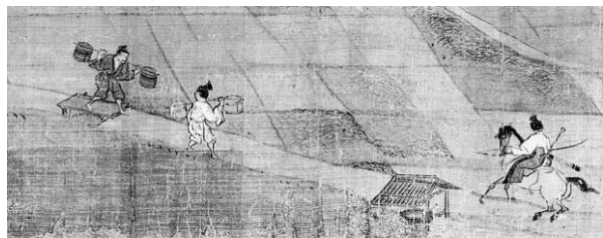


図-23 『一遍聖絵』(第9)淀の上野の京街道

(3) 主要街道の橋

当時の主要街道の橋の多くは、上記の宇治橋や勢多橋のような本格的な桁橋構造の橋であったわけではない。

『一遍聖絵』(第9)の淀の上野の板橋は、当時の京と大坂を結ぶ街道筋の橋であったと考えられ、図-23のような、近傍の細い道も狭い板橋も同じ街道の施設であった可能性は高く、主要街道といえども〈粗末〉な構造のインフラで成り立っていたことが指摘されている⁵⁾。

都市内の主要道路の橋について見ると、上に示した『一遍聖絵』(第7)の四条東京極付近の桁橋は道路幅より幅員はかなり狭い。また、(第7)の堀川の板橋は、東市に近い要路にも関わらず一人が通れるだけの貧弱なものであった。図-1にも東市堀川の板橋が見える。

このように都市の主要道路や主要街道筋の橋といえども、かなり貧弱なものが多かったことになる。

(4) 筋違について

筆者は以前、文献2)において「中世の橋では、橋杭を補強する筋違が用いられた形跡はない」とした。今回、多くの絵巻物を見直す中で、『年中行事絵巻—別本第一』の「賀茂社楼門前の反橋」に筋違が描かれているのを見付けた(図-24)。

『年中行事絵巻』の原本は1165年前後に成立したもの

と推定されており、橋に筋違が適用された時期はそれ以前とする証拠となりうる。しかし、この作品はずっと後世の模本であり、その製作年代もはっきりとしない。さらに、この図の反橋の下部構造は橋脚柱が横梁を貫通するように描かれており、常識的にはあり得ない構造になっている。その他、同場面の橋殿の絵にも不自然な点が見受けられる。このことから、この絵を信頼して、12世紀中頃には橋に筋違構造が適用されていたと結論付けることは出来そうにないと考えた。

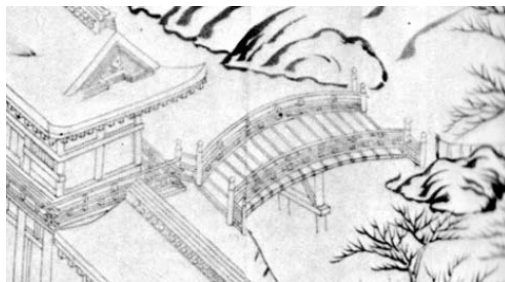


図-24 『年中行事絵巻—別本第一』「賀茂社楼門前の反橋」

筋違が建築物に適用されたのは承久元年(1219)に完成した法隆寺舍利殿絵殿の大壁に入れられたのが最初であるとされている⁶⁾。絵巻物にも『法然上人絵伝』(巻14)の「比叡山円融房」や『春日権現験記絵』(巻10)の「比叡山の房」や『一遍聖絵』(第7)の「市屋の道場」など、筋違が入られた建築が描かれているものがあり、一般的に建築物に筋違が使われた証拠となり得る。

一方、他の絵巻物には橋に筋違が入られた場面はなく、橋に筋違が入られた確かな証拠は江戸時代後期のこととした、文献2)の記述を変更するには至らないと考えている。

・あとがき

絵巻物が平安時代後期から中世の橋をはじめとするインフラの状況を考察する上で貴重な情報を提供してくれたことを示すことができた。一方、採用にあたっては、その内容の十分な吟味が必要であることを確認した。

〈参考文献〉

- 1) 澁澤敬三編: 日本常民生活絵引第1~5巻, 1984.
- 2) 松村博: 中世の橋の構造、藤原良章編『中世のみちと橋』, pp. 105~120, 2005. 6
- 3) 阿蘇品保夫: 中世における橋の諸相と架橋、熊本県立美術館研究紀要第7号, 1995. 3
- 4) 松村博: 京の橋物語, pp. 75~88, 1994. 9
- 5) 藤原良章: 絵巻物の中の橋、帝京大学山梨文化研究所研究報告第8集, pp. 327~343, 1997
- 6) 鈴木嘉吉: 古代建築の構造と技法、『奈良の寺2—法隆寺東院伽藍と西院諸堂』, p. 17, 1974. 8

(2022. 4. 18 受付)